

(別紙様式3)

令和3年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都渋谷区渋谷1-21-18
管理機関名 学校法人 渋谷教育学園
代表者名 理事長 田村哲夫 印

令和2年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月23日（契約締結日）～ 令和3年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校
学校長名 田村 哲夫

3 構想名

協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

4 構想の概要

テーマをSDGs（持続可能な開発目標）とし、中でも平和、貧困、保健、ジェンダー、水問題、エネルギー、気候変動、イノベーションなど、高校生の生活に身近な課題を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場（学びのオリンピック（仮称））を定期的に開催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和2年4月23日～令和3年3月31日）											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト P&Fプロジェクト R&Aプロジェクト 特別講座 運営指導委員会 報告書及びHP 学びあいの場活動				←							→	
	←				←						→	
		◇	←	→				↔				↔
			←	→					←	→		

(2) 実績の説明

本学園は、「自調自考」－自ら調べ、自ら考える－という教育の基本目標のもと、「高い倫理感を養う」、「国際人として資質を養う」ことを教育目標に掲げている。この3つの目標のもと、社会課題に対する問題意識をもち、課題探究活動、社会貢献活動を通じて、その解決にむけて尽力する姿勢を育む教育活動を中高一貫校の特徴を生かし、取り組んできた。平成26年度より、学園内の2つの高校がそれぞれSGHの指定を受け、グローバル人材の育成に取り組んできた。その連携のもとで進めてきた人材育成をより発展的なものとするべく、海外や遠隔地の高校に連携のネットワークを広げ、協働して人材育成を進めるため、下記のように、連携校との合同プログラムをオンラインを活用して行った。また、多くの人材を輩出している東京外国語大学、電気通信大学との連携を進め、高大連携のもと、より発展的な学びを求める生徒たちへのカリキュラムの構築支援のための検討を進めた。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け登校できない期間もあったが、学内において生徒が参加するネットワークを構築し、授業や生徒活動の支援を行った。また海外への留学や進学、協働型学習活動、国際会議、国際コンクールへの参加、報告への支援を行った。

① ALネットワーク委員会の開催

ネットワーク構築のための特別委員会を開催し、国内、海外との情報共有、連携構築のための準備を行った。授業拠点校においては、すべての生徒に個人のメールアドレスを付与し、自宅でのネット環境を整え、情報共有ができるようになった。（2020年度開催回数9回、校内ネットワーク構築委員会 9回）

② カリキュラム特別委員会の開催

実施計画の運営、検討、評価を行う特別委員会を開催し、特に3つの大型プロジェクト（Peace, Justice and Strong Institutions project、Partnerships for the goals project、Research and Analysis project）に関する研究開発及び高大連携プロジェクトの検討に取り組んだ。また、海外や国内での宿泊を伴う研修が中止となったことから、校内での発表会に切り替え、オンラインでの発表ができるように支援を行った。（2020年度開催回数 12回）

③ 連携校及び近隣校との協働プロジェクトへの支援

- ・早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校、渋谷教育学園幕張高等学校とオンラインでつなぎ、ビブリオバトルを主催した。12月25日【学びあいの場活動】
- ・広島女学院の高校生とオンラインでつなぎ、核と平和に関する課題を教育でどのように取り扱うべきか、次世代への継承をいかにはかるべきかといったテーマについて、話し合う場を設け、自分たちの取り組むべきことを考える機会を設けた。
1月16(土)、2月6日(土)【Peace, Justice and Strong Institutions project】
- ・渋谷高等学校で開催された探究活動の発表会の様子を記録し、関心のある連携校と共有した。次年度にむけてオンライン参加についての模索する機会をもうけた。発表は、ポスターセッション形式で行い、それぞれが取り組む活動についての理解を深める機会を設けた。
2月20日(土)【Research and Analysis project】

④ 連携大学等との協働カリキュラム開発および発展的な学びの場支援

- ・ 渋谷高等学校の授業へ、東京外国語大学の大学院生にメンターとして、オンライン参加していただき、異文化への理解を進めるとともに、社会課題に対する日本以外の国の考え方に触れる機会を設けた。課題解決に向けた生徒へのアドバイスとともに、カリキュラム開発に関する助言をいただく機会を設けた。（2020年度 参加人数7名）

【Peace, Justice and Strong Institutions project, Partnerships for the goals project】

- ・ ロボット研修会

学年・文理等の区別なく生徒が関心を持ち探求したいという要望を踏まえての研修会、外部人材を活用。

- ・ 卒業生ネットワークの構築

生徒の探究活動を支援するため、卒業生によるライティングセンターを開催した。来校できない期間は、卒業生の連絡先を公開し、同窓会を通じて、在校生とつながるネットワークの構築に取り組んだ。

（2020年度 ライティングセンター協力卒業生数6名）

- ・ 外部講師による講演会

2050年の世界を理解するため、専門家を招いての講演会を行った。大規模なものから、ワークショップを伴う小規模のものまで開催できるよう支援、感染予防対策を講じつつ直接対話できる環境を整えた結果、オンラインと対面の双方の良さをいかし、それぞれに特徴ある講演会を開催できた。また、事前の事後の学習や質問などは、オンラインを積極的に活用し、短時間で効率的な運営ができるよう時間や回数を工夫した。

（2020年度講演会開催 10回）

- ・ 生徒の留学・進学を増やすために、海外大学との連携を視野に説明会や卒業生による体験を語る会を設けた。また、現地の情報を獲得できるよう人材の育成に努めた。

⑤ 国際協働プロジェクト実施

下記の交際交流プロジェクト実施についての支援を行った。

- ・ St. Stephen's Episcopal School（アメリカ）との協働をオンラインを活用して行った。平和と核について、チームで意見をまとめ、人間の安全保障の在り方について、連携校の高校生に直接訴える機会を設けた。訪問ではなく、オンライン上で、意見交換を行い、生徒が作成したブローチャーに関して評価し、優秀賞2チームを選出した。

【Peace, Justice and Strong Institutions project】

- ・ Ruffles Institution（シンガポール）との協働

通常訪問できない現状をふまえ、オンラインを活用した相互交流の機会を設けた。テーマを英語教育とし、英語圏であるシンガポールと非英語圏である日本の教育システムを比較検証し、母語と外国語の関係について意見を交換した。授業参加とはならなかったが、密度の濃い議論を行うことができた。

交流参加校 渋谷教育学園渋谷高等学校及び幕張高等学校

- ・ Dunman High School（シンガポール）との協働

日本文化に関心のある日本クラブのメンバーとともに、それぞれ自国の遊びを通して、自国の文化的特徴について理解を含める機会を設けた。ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使い、分科会の実施にも取り組んだ。

*2020年度のシンガポール研修は、感染症の影響により訪問中止となった

- ・ 世界大会への派遣

オンラインで実施される様々な高校生世界会議に代表生徒が参加できる環境の支援を行った。

（模擬G20高校生会議 ・ 英語ディベート世界大会参加）

- ・ さくらサイエンス受け入れ

さくらサイエンス事業により、シンガポールの高校生とオンラインで交流する取り組みを行った。参加人数30名

交流校：NUS High School of Math & Science ・ Nanyang Girls School

- ⑥ 生徒の自主的な社会課題活動への支援
 生徒たちの自発的な活動を支援すべく、校内での広報や保護者への説明を行った。
 今年は、実際の活動ができない環境下ではあったが、計画を明示し、校内で生徒が開催するさいの留意事項を定め、実施マニュアルの共有と公開を進めた。
 また、オンラインでの発表や参加ができるよう教員が活用できる ZOOM アカウントを取得した。研修での移動が制限されたことから、一部の活動を学校のある渋谷地域での事例に切り替えて行った。
 (高校2年生による活動 206名/その他の活動 多数/会場利用 4回)
- ⑦ 運営指導委員会開催
 取り組みの状況を確認、指導・助言をいただくために、2回の運営指導委員会を予定した。第2回については、新型コロナ感染拡大による中止を余儀なくされたが、文書による説明を行った。(開催回数 2回)
- ⑧ 学びのオリンピック(仮称)実施準備開始
 校内に実行検討委員会を設置し、それぞれの活動との調整を行った。また、外部人材との交流を積極的に進め、2021年度に協力をいただけるような環境整備を行った。
 また、地域連携にも力を入れ、定期的なミーティングの機会を設けた。
- ⑨ 取り組みの紹介
 本校の取り組みの理解を進めるため、ホームページ等を活用した情報発信を積極的に行った。また外部の研究会での発表を支援するなど、教員の取り組みを支援した。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間(令和2年4月23日～令和3年3月31日)											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト				←	←	←	←	←	←	←	←	→
P&Fプロジェクト	←								→			
R&Aプロジェクト										→		
特別講座			←	→					←	→		↔
運営指導委員会			◇								◇	
報告書及びHP										←	→	
学びあいの場活動			←	→								

(2) 実績の説明

探究型学習活動を教科、学校の枠を超えた連携のもと発展的な内容とし、高校生同士のネットワークを構築する目的のために計画に基づき、実施した。

① Peace, Justice and Strong Institutions project

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジレンマについての理解を深める。多様な文化、価値観に触れるとともに、AIや宗教など、幅広い分野に学びを深めた。現地でのフィールドワーク、広島女学院との交流を通じて、一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表した。発表や成果物の作成については、東京外国語大学の大学院生の指導を受けた。代表チームの生徒10名が、連携校であるフロリダの St. Stephen's Episcopal School の授業に参加し、英語で授業を行った。

(連携教科：情報・公民・英語・国語)

(連携校：広島女学院、St. Stephen's Episcopal School、東京外国語大学)

(対象：高校1年全員 年間)

《取り組み事例Ⅰ(抜粋)》 ヒロシマから考える

一昨年から始まったWWLは、これまでのSGHの5年間の「ヒロシマから考える」取り組みを基に、新たな視点も加えて継承・発展させ、「ヒロシマから戦争を考える」と

した平和学習を行った。英語の授業や国語（現代文）とも並行しながら現代社会の授業として展開することで、多角的な視点を加えて考察する機会が増え、生徒にとって意義が大きいプログラムとなっている。

a. 公民科による事前学習

現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫した。広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては、アメリカ合衆国トランプ大統領の選挙戦・米中覇権争いなど時事問題を取り上げることや、前年（中学3年次の公民の授業）の日本の安全保障政策（集団的自衛権）や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。

また、国連を中心とした「核兵器禁止条約」の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。「戦争の加害と被害」という視点を持ち、から考える授業に取り組んだ。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。原爆関連のDVDはNHKスペシャル『証言と映像でつづる原爆投下・全記録』、NHKアナザーストーリー『オバマ大統領～広島への地へ歴史的訪問舞台裏～』を視聴した。また、情報の授業においてNHKスペシャル『“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館』を視聴する機会も設けた。

授業は、生徒が考えることを中心にすえるため、「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。議論難民を出したくない。お客さん（部外者、関心がない）になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするようよう、生徒が希望する核廃絶・核使用・核抑止のグループ（各1名）に分かれ、自分の立場を発表し議論を行い、互いの立場について批判的に問題点を指摘した。論点を整理することで、国語・英語の取り組みにつながった。

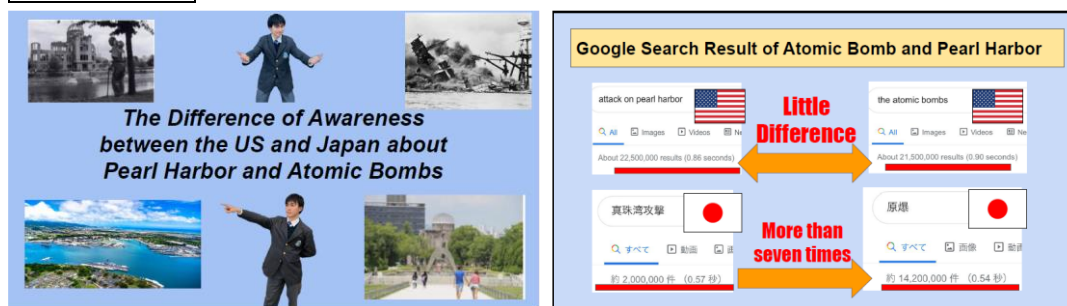
b. 国語科による比較文化論としての核（立場と表現）

課題図書『黒い雨』（井伏鱒二）を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を行った。日本側の表現作品として、『黒い雨』（井伏鱒二 1966 新潮文庫）を、アメリカ側の表現作品として、①『渚にて』（1959）、②『未知への飛行』（1963）、③『トゥルーライズ』（1994）、④『ブローケン・アロー』（1995）、⑤『ダークナイト・ライジング』（2012）を選んだ。異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。授業を通じて、広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得することを目指し、また、文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解することを狙いとした。実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める経験を通じて、核兵器や平和についての課題を見出し、自分なりの意見を持つことができていたようである。また、相手に伝わる表現方法についても理解を深めることができ、今後の英語科のブローチャープロジェクトへつながった。

c. 英語科による Hiroshima Brochure プロジェクト

「現代社会」「現代文」の授業で扱っている「広島・長崎の原爆投下」に関して、世界へのどのように伝えるかを意識し、プロジェクトに取り組んだ。被害者と加害者という区別ではなく、将来へ何を伝えるべきかを考え、英語での表現に取り組んだ。クラスで選ばれた作品を連携校の Saint Stephen's Episcopal School へ送り、評価のフィードバックをもらった。今年は訪問ができずに終わってしまったが、互いの学びを確認する時間となった。なお、優秀チームは、学校代表として、広島県におけるワールド・ワイド・ラーニング(WWL)コンソーシアム構築支援事業国内フォーラムに参加した。

Brochure 作品 (一部)



② Partnerships for the goals project

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、SDGs に取り組む企業や機関、団体と連携し、社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育んだ。

また、学びを他者と共有すべく、校内での発表を行った。

(連携教科：総合的な探究の時間・英語・地歴・生物・保健体育・家庭)

(連携大学：電気通信大学・東京外国語大学)

(連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど)

(対象：中学2年生全員・高校1年希望者・高校2年生全員・高校3年希望者 通年)

《取り組み事例Ⅱ(抜粋)》 世の中を考える

a. 中学2年生 SDGs プロジェクト

今年度の研修行事の見直しを受け、SDGs を中心に身近な課題について、考えを深める機会を設けた。中学2年という時期に、まず「SDGs」というキーワードを通して世の中を知り、自分たちの行動と結びつけることで、社会の一員としての自覚を促す取り組みを目指した。各自興味があるゴールを選び、そのメンバーで班を編成することで、取り組みやすくなるよう配慮した。また、ポスターセッションという形で活動報告をし、学びの共有をはかった。また、企業における SDGs の活動の実態について学ぶ会を開催するなど、外部との連携をはかった。

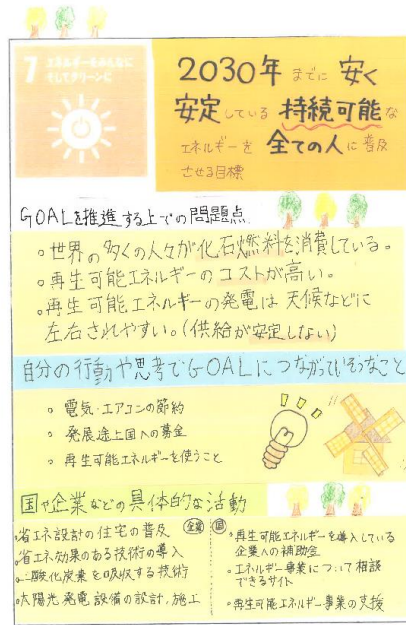
初めての試みだったが、事後のアンケートからも生徒の満足度が高いことがわかった。(満足 45.1 普通 52.8 不満足 2.1)

自分たちの生活と SDGs の関わりを考える ことで、社会課題を身近なものにとらえることができた。また、異なるテーマの発表会開催を通じて、自分の興味関心を広げることになり、中学3年生で学ぶ公民の授業へのつながることとなった。

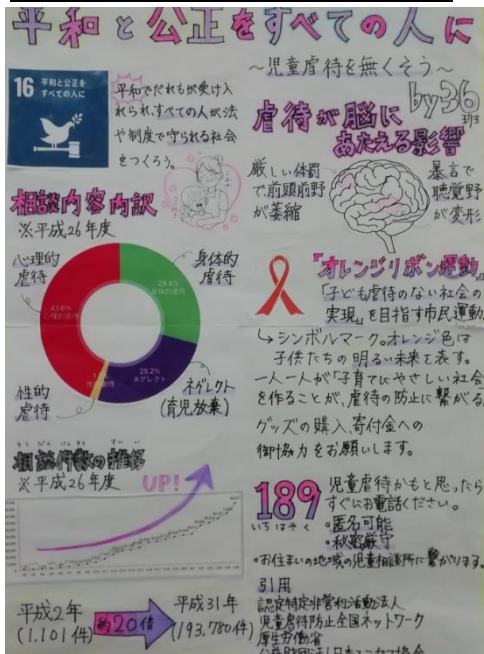
ポスターセッション風景



作品例



ポスターセッション用ポスター例



b. 高校1年生 2050年の世界を考える (英語科・公民科協働)

公民科では、経団連が推進する「Society 5.0 for SDG s」を取り上げ、AIやIoT、ロボット、ビッグデータの活用など、革新技術を活用した社会の到来を予測する授業を行った。ゲノム解析など生命倫理とも結び付け、倫理的な課題や社会課題の解決についての議論を重ねた。学ぶだけでなく、生徒自身が自分の言葉で考えを主張することをゴールにすえた。授業テーマとして、
 ・情報通信分野の米中の主導権争い、
 ・新型コロナウイルスの感染拡大が世界に与えている影響、
 ・AI との未来...AI は天使か悪魔か、
 ・Society 5.0 for SDG s を取り上げた。

また、現在の課題に対して、どのような解決方法があるか、話し合いを行い、実際にカンボジアにおける社会課題解決のための事業プラン作成に取り組んだ。優れた発表を行ったチームは実際に起業にむけた動き出しを企業の支援を受けながら進めている。

*カンボジアプロジェクトについて

生徒は班を組み、カンボジアの課題を踏まえ、国際協力や医療の観点から、現地課題を解決するための事業プランを策定し、発表を行った。1学期に使用した「SDG s スタートブック」も活用し、課題を5つ以上洗い出し、その中から自分の最も興味

のあるものを1つ選び、その課題の対象となっている人、・エリア・解決のために既に取り組みられている施策または組織（行政・企業・NPO等）について、調べ、具体的な提案を行う。

事業プランについては、アイデアの面白さやプレゼンテーションの技術ではなく、「投資家の視点」から評価を行った。評価者は同級生・教員・企業人であり、それぞれの持ち点から、優秀と思う班に投票した。結果、教育支援と飲料水支援の2チームが選ばれた。

英語科では、公民科で学習したトピックに関する英文課題を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに、自分の考えを英語でエッセイにまとめた。

- c. 高校2年生 Service Learning に取り組む（英語科・総合的な探究の時間 協働）
これまで Global Issues の解決につながる活動を各人で計画、実行する。そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。活動は、校内外を問わず、関心のある分野で行うようにした。事後、英文レポートにまとめ、活動内容を他の生徒と共有した。今年は、活動に制限がある中、以下のような活動に取りくんだ。

- （活動例）
- ・子ども食堂でのボランティア
 - ・超福祉展でのボランティア
 - ・SDGs Site（SDG で人をつなぐウェブサイト）の作成
 - ・くま川鉄道の募金活動
 - ・九十九里浜の掃除 等

③ Research and Analysis project

本校の教育目標の一つである「自調自考」、自ら調べ自ら考える探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげるため、中学1年から学習活動を継続していく。特に課題を発見すること、問いをたてる活動を丁寧に行っていく。社会が変化するなかで、常識に疑問を持つ力はいつそう重要になる中、知識と問う力の両方がそろうことで、世の中の問題を自分ごととして考えることにつなげる取り組みを行う。

この活動を通じて、自分の興味・関心のある領域について深く学び、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、自分自身に対する理解を深め、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。また、この活動の集大成として、生徒全員が論文作成に取り組む。

（連携教科：総合的な探究の時間・国語・公民・理科）

（連携大学：電気通信大学・東京外国語大学）

（連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど）

（対象：高校生全員 通年）

《取り組み事例Ⅲ（抜粋）》 自調自考を考える

- a. 公民科の取り組み（高校1年生 希望者）

日本経済新聞社と連携し希望者を対象とするワークショップに取り組んだ。一つは「問いをデザイン」すること。新聞記者の方の「問い」を立てることの意義や、批判的に考えるプロセスを共有した。もう一つは日本経済新聞の高校生向け特別版の編集者との企画から、紙面で紹介されていたユニリーバ社に協力いただいた「ほしい未来を考える」機会を設けた。「問いをデザインする」際には、新聞記者の視点から、疑問をもつことが始まりであることが生徒に伝わり、次々と活発な問いと答えが行き交った。

＜グループワークの一例＞

問いを深めるとは、どういうことか、コロナ禍でオンラインなど新しい授業の形から、学校での時間の使い方に疑問を持った生徒からの問いでは、

「どうして学校には昼寝の時間がないのか？」 why
 →眠くなる欲求にはあらがえないから why
 →結果的に授業を聞けなくて非効率 why
 →時間をもたない why
 →せっかくハイレベルな授業を受けられるのに why
 →自分の意思に反して学びたいことが学べないから
 と変化していった。

こうした問いをきっかけに、「学校がない時代はどうしていたのか」「日本の生徒は学校に何を求めているのだろう」など、様々な角度から考えを巡らせていた。

また、問いをブラッシュアップした後の発見は、「学校は幸せを求めるところ」「芸術は人生を豊かにするもの」など、問いは、ポジティブな表現に変わっているものが多かった。

自分が不満に思っていることでも問いを繰り返し深めることで考えが深まる学びにつながった。

b. 公民科の取り組み 「ほしい未来をつくろう」 (中高生 希望者)

SDGs 先進企業のユニリーバ・ジャパンと協働し、「ほしい未来」について考えるワークショップを開催した。ワークショップでは、「気候変動」「ごみ問題」「ジェンダー平等」などの関心のあるテーマごとに 11 チームに分かれ、高校生をリーダーに中学生と学年混合チームで課題に挑んだ。各チームにはユニリーバ社員や教員、日経 HR 社員がファシリテーターとして参加し、「ほしい未来」をつくるために話し合う生徒たちをサポートした。現状を考え、課題を見つけ、具体的な活動につなげる中で、学校生活で当たり前と思っていたことに疑問を持つ生徒も発言し、そのうえで、解決に向けた糸口をめぐり、活発な議論を交わした。総合学習で得た知識を先進的な企業とのディスカッションを通じて、「実践できる」ように考える取り組みを行った。



c. 論文作成の取り組み (高校生 通年)

一人ひとりが設定した問いに対して、長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成した。作成過程において、卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生や連携校の生徒とともに、自分たちの学びを共有した。

④ 全国高校生フォーラム 2020 参加

2020 年 12 月 20 日、高校 2 年生 4 名が全国高校生フォーラム 2020 に参加した。今年、オンラインによる開催となったが、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合う貴重な経験となった。

今年度の参加生徒が、高校生フォーラムに取り組んだきっかけは、本校が国際理解教育の旗印のもと大切にしている国際交流である。シンガポールのトップ校である Raffles Institution との相互交流が、コロナ禍で中止となる中、参加予定の生徒達からの強い要望があり、オンライン交流が実現した。交流のテーマを英語教育にとし、6 月から準備をはじめ多くの同学年の仲間を巻き込んで 9 月に 2 回のオンライン交流を行った。この

実りある成果をぜひまとめて全国の高校生と共有しようと発表者4名と中心メンバーたちが2か月以上を費やしてポスターを作成した。SDGsの発表には少ないHumanitiesの分野で挑戦した。他国の高校生と交流したからこそ、また、日本における英語教育と母語についてしっかり時間をかけて学んだことで、生徒たちも自信を持って発表に向き合った。

SDGsの4.Quality Educationを基軸に、言葉の喪失と文化の喪失をシンガポールと日本に当てはめての議論は内容に深いものとなった。

また、今年度は、本校生徒2名が総合司会を務めた。



⑤ 海外プロジェクトの充実と参加支援

コロナ禍においても自宅から参加できる取り組みを生徒へ紹介し、活動を支援した。生徒がオンラインで活動できる場を提供した。また、授業で活用できる端末を増やし、海外との交流が円滑にできるよう回線の増強に取り組んだ。国際交流で発表した研究内容は、12月に行われた全国フォーラムでの発表につなげるなど、多くの実績をあげた。

(連携校：渋谷教育学園幕張高等学校・Ruffles Institution・Dunman High School)

(対象：中学生希望者・高校生希望者)

《取り組み事例Ⅳ(抜粋)》 オンライン高校生会議への参加

2020 Model G20 Virtual Summit (模擬G20サミット高校生会議)への参加

*主催:Knovva Academy 後援:Y7 2020 及び Young Professionals in Foreign Policy
今年度は、オンライン開催 18の国と地域からの405人(60チーム)の高校生が参加
この会議に本校高校生3名が日本代表として参加した。

会議のテーマとして、気候変動(Climate Change and the Future of Humanity)を取り上げ、チームがそれぞれの国の代表となり、本校生徒は、イタリアを担当した。会議では、ゲストのProfessor Sam Myers of Harvard Th Chan School of Public Health, Professor Cary Krosinsky of Brown University and Yale Universityによるキーノートスピーチの後、チームごとにG20の国の代表として政策を作成し、最終日にそれを他グループの前で発表した。その結果、本校生徒たちは、Most Outstanding Country Delegations - Argentina(最優秀賞)、大臣を務めた高2生がBest Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable(最優秀大臣賞)を獲得するなど、主催者や関係者から非常に高い評価を受けた。

<参加した生徒の感想>

1月31日から2月20日までの3週間、18の国と地域から400名以上の高校生が集ったオンラインの国際会議であるModel G20 Virtual Summit 2021に参加しました。割り当てられたG20の国の大臣となり「気候変動と人類の未来」について議論し、国ごとに政策を考えました。私はイタリアの「環境と持続可能な開発大臣」として議論の場における自分の立場に戸惑いながらも、積極的にアイデアを出したり他の大臣に質問をしたりすることで建設的な意見を出し合える雰囲気をつくることを心掛けました。

ハーバード大学教授であるSamuel Myers氏やイエール大学とブラウン大学で教授を兼任しているCary Krosinsky氏の講義はとても興味深く、リアルタイムでCary Krosinsky

氏に質問をし、答えていただくことができた時はとても嬉しかったです。最終日の政策発表に向けて、EU の調査書を読み漁ったり、時差のため夜中の 1 時からミーティングを始めたりと大変でしたが、環境と持続可能な開発を担当する大臣として最優秀賞をいただくことができました。チームとして賞をとれなかったのは残念でしたが、様々な背景を持った高校生と一丸になって、気候変動に立ち向かうという目標のもとで議論ができたのは素晴らしい経験になりました。何よりもこの会議で感じられた「世界の人とつながる」という感覚をこれからも大切にしていきたいと思います。



▲最優秀賞を獲得したチームの記念写真。上段右が本校の高2生

⑥ 特別授業・講演会の実施（年8回）

オンラインと対面を併用した多彩な内容に関する特別授業を年間のカリキュラムに位置づけ、実施した。今年度は、長期休暇期間内だけでなく、放課後も活用することができ、予定を超える回数を実施できた。また、地域との協働プロジェクトにも取り組み、これにより、ネットワークが広がった。次年度の学びのオリンピック（仮称）につながることを期待される。

（テーマ）

AI・環境・LGBT・異文化理解・地域交流・感染症・ロボットワークショップ

（対象：全学年希望者）

⑦ 報告書及びホームページの作成（3学期）

年間の取り組みを公表できるよう報告書を作成した。また、国内外の視察を積極的に受け入れ、活動の周知を図った。また主権者教育で、取り組みを紹介した。

⑧ 学びあいの場の開催

新型コロナウイルスの影響を受け、対面での交流が制限されることとなった。次年度に向けて準備として、小規模な学習イベントを開催し、運営の方法についての検証と検討を重ねた。また海外とのオンライン交流を定期的実施することで、海外校とのネットワークを続ける取り組みを行った。イベントには、連携校及び他校で関心のある生徒が参加した。

（取り組み例）

- ・オンラインビブリオバトル（英語 日本語）《事例として紹介》
- ・英語ディベート

・ルーキー模擬国連大会・プラスチックボトルを考える会・全国高校生フォーラム司会担当（英語での開会宣言ののち、概要の説明、進行に努めた。）

《取り組み事例Ⅴ（抜粋）》

2020年12月25日に、本校図書委員会がホストとなって3校によるオンラインビブリオバトル交流会を行った。洋書部門、和書部門に分かれて、それぞれが持ち寄った本を紹介

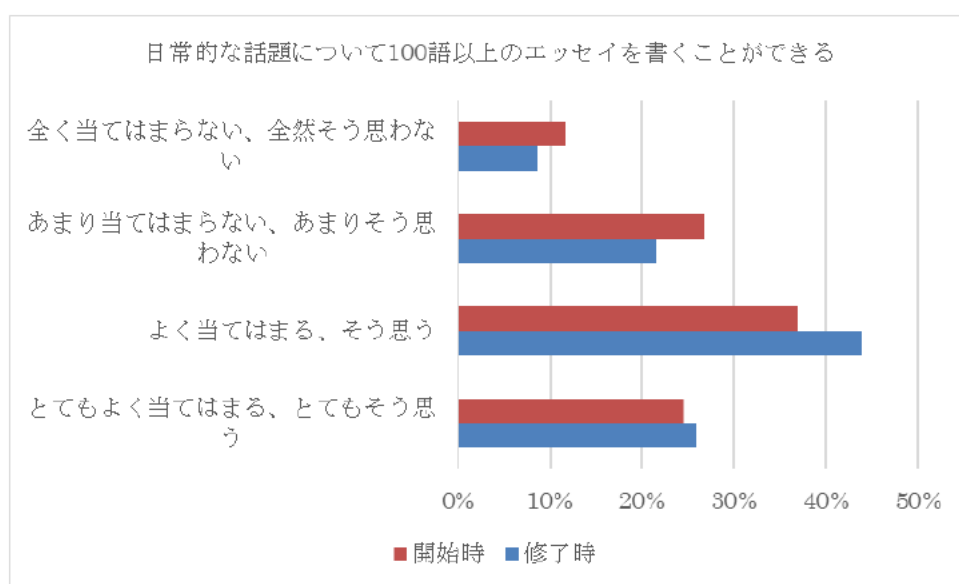
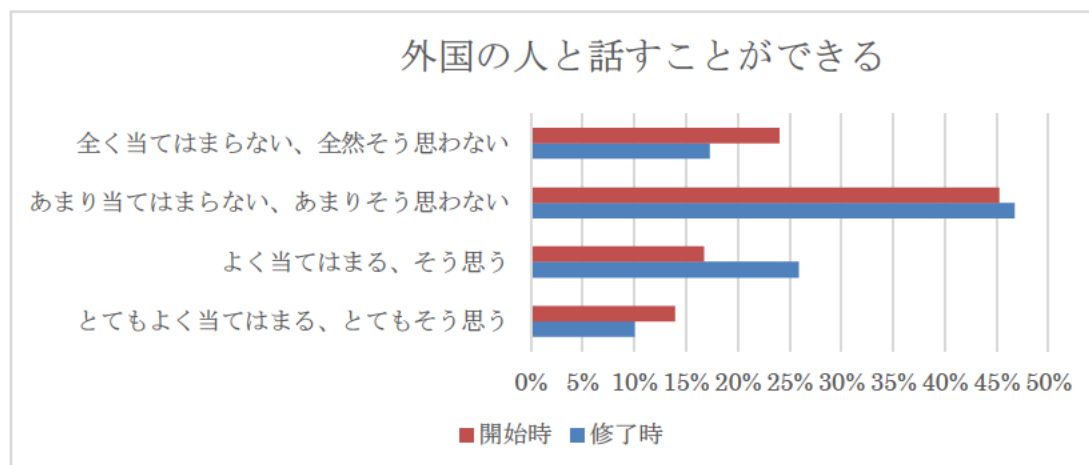
しあい、最も読みたいチャンプ本を決めた。また、同時に学校ごとに鑑賞会も開催し、大会の様子を見ることもできるようにした。

参加校：渋谷教育学園渋谷中学高等学校 渋谷教育学園幕張中学高等学校 早稲田渋谷シンガポール校

8 目標の進捗状況、成果、評価

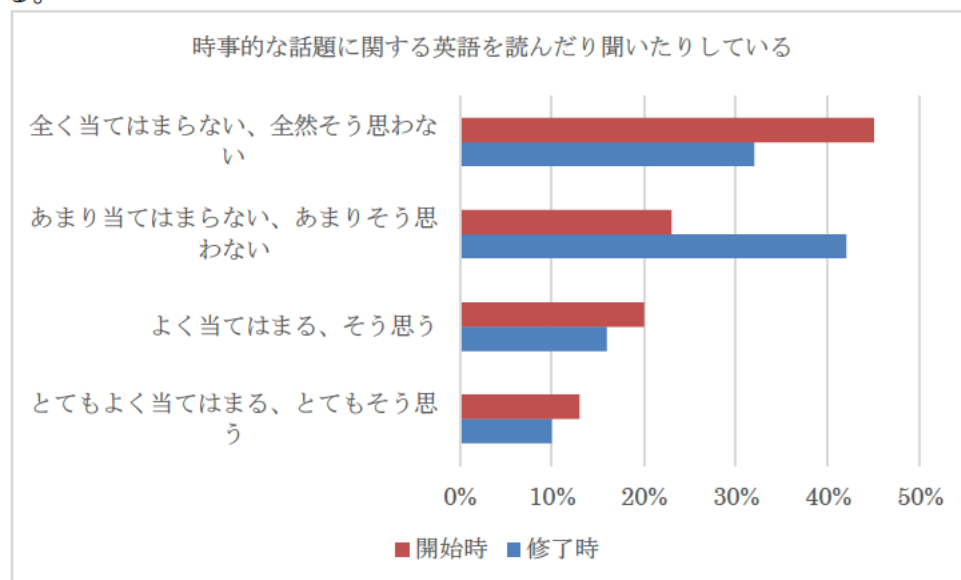
(1) 生徒には、授業アンケートとWWLアンケートの2種類を実施し、SGHからの連続的な変化を成果として分析する予定である。今年は、登校できない期間があったことから、ここでは、最も影響を受けたと思われる高校1年生の分析と卒業する高校3年生の3年間の分析を行う。アンケートは、地球市民に関するモチベーション（意欲）とスキル（英語への取り組み）、好奇心（主体的な取り組み）の3つの柱からなる。学年ごとの分析と過年度との比較を行い、成果を確認する。

高校1年生 (WWL 四期生) の分析 項目 I 英語スキル
 今年の高校1年生は、オンライン授業となった期間があったため、例年に比べ、インターネットを活用する割合が高いことが読み取れた。他方、開始時（6月）と終了時（3月）での比較では、話すこと、書くことで、自信を持つ生徒が増えており、プログラムの成果が読み取れるが、例年にくらべ、話すことに自信のない生徒の割合が高く、中学3年生での海外研修が中止となった影響が読み取れる。



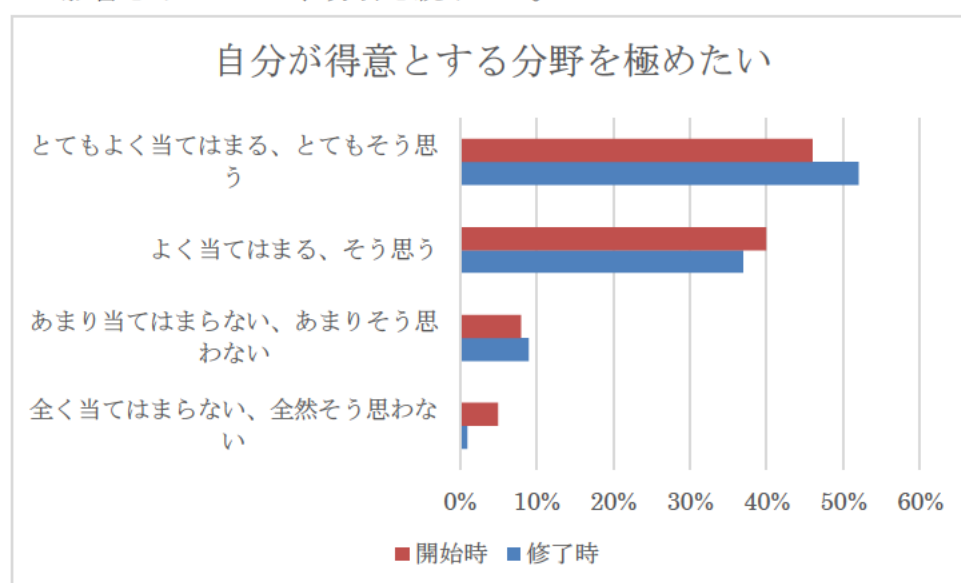
項目Ⅱ 好奇心

英語で情報を集めることについては、当てはまらないと答える生徒の割合が一定程度減少したものの、大きな変化となるまでにはいかなかった。今年は、日本語での活動が増えたこともあり、英語での活動が例年に比べ、少なくなったことが影響している。また、海外交流の機会も減少したこともあり、自分から進んで行うといった機会がなかったことも影響している。次年度は、生徒自身が活動したいと思える仕組みづくりが課題である。



項目Ⅲ モチベーション

自分が得意とする分野を極めたいと思う生徒が 90%近くいることから、例年に比べて、大きな変化はなかった。一方、海外で学びたい、海外で働きたいと思うと回答する生徒が少なく、コロナの影響が感じられる。学習活動が制限されたことが生徒のモチベーションに影響を与えたのか、分析を続けたい。



高校3年生(WWL 二期生・SGH 第五期生)の分析 3年間における意識変化

項目Ⅰ 英語スキル

学年全体の特徴として、自身の能力に対しての評価が控えめであることが多い学年であった。よって、緩やかな上昇にとどまっている項目も見られるが、一方で、高1の開始時と比較して、(2)洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる(36%→63%)、(3)英語の新聞を読むことができる(26%→55%)、の項目では、プラス30%以上の著しい伸びを見せた。また、(5)インターネットの英語サイトを利用することができる(38%→60%)、(7)地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる(33%→54%)、の項目ではそれぞれプラス約20%という伸びを見せた。一方話すことができるという項目で、高2から高3で減少した。(50%→46%)発話も規制されたことが影響していると思われる。

項目Ⅱ 好奇心

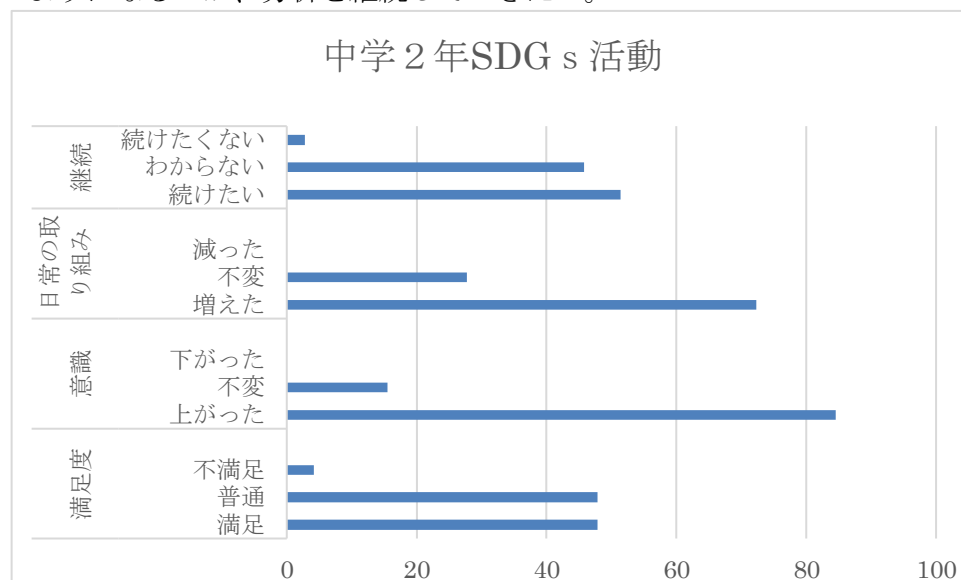
こちらも緩やかな上昇が見られる項目が多い。学年生徒の傾向として自分に対して厳しい評価をする生徒が多いため、全体として前向きな回答を示す割合が低かった可能性がある。(11)新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む(25%→45%)、(13)政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている(18%→34%)、(19)その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている(23%→42%)、の項目では約20%の上昇が見られた。学校での授業外にも、自ら「やっている」と自己評価できるほど、自主的にインターネット上で関連記事を探して読むなど、英語を情報を得るためのツールとして用いることができる生徒が多くなってきている。一方、上昇が例年に比べ、穏やかになっているのは、コロナに関するニュースが多数を占め、報道に関心を持ちにくい日常が影響したと思われる。

項目Ⅲ モチベーション

全体的な数値として高校1年開始時より50%を超えた数値がよく見られており、モチベーションをもって、様々な活動に取り組んでいることがわかる。特に、(21)自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい(88%→91%)という項目では、3年間常に90%近くの数値をキープした。(23)自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい(55%→60%)、(24)日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい(55%→60%)、(25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい、(28)将来留学したり仕事で国際的に活躍したいの項目は高校3年修了時に約60%が前向きな姿勢を見せている。しかし、留学に関しては、伸びたとまでは言えず、交流が進まない日常の影響を反映している。全体として、自分への評価はやや控えめであるものの、グローバルな世界でリーダーとして、自分の得意とする分野で活躍したいという、内に秘めた熱い情熱があることが分かるので、コロナの影響が収まることを期待したい。高校生の段階では、自分のキャリアに迷うこともあるのだが、本校では、(21)の数値にも見られるように、まずは自身の得意分野をじっくりと、コツコツと極め、そして世界に発信していきたいという考える生徒が多い。SGH、WWLの両プログラムが、一つのキャリア教育の一環として可能性を広げたと考えられる。

中学2年生の分析

今年初めて、中学2年生で、SDGsについてのポスターセッションを実施した。事後アンケートからは、SDGsへの意識変化や行動への意欲が読み取れる。高校へ進学後、これまでと異なる意識が育つようになるのか、分析を継続していきたい。



(2) 活動事例における生徒たちの活躍

① P & J project (Peace, Justice and Strong Institutions project)に関する活躍

<中学生>

- ・第1回JAXA「きぼう」プログラミングロボット競技会 (Kibo-RPC) 世界大会 優勝
(宇宙ステーション「きぼう」船内のロボットを、プログラムで遠隔制御する競技)
- ・東京都都民安全推進本部主催「SNSトラブル防止動画コンテスト」 優秀賞
- ・ロボカップジュニア2020 サッカー (ライトウェイト) 関東大会優勝 (日本大会は中止)

<高校生>

- ・文部科学省 WWL2020 全国高校生フォーラム 総合司会
- ・2020 グローバル ユースリーダーシップ カンファレンス (18ヶ国の各代表160名によるオンライン国際会議) 日本代表
- ・会津大学、福島県、全国高等学校パソコンコンクール実行委員会主催 全国高等学校パソコンコンクール 「パソコン甲子園 2020」 プログラミング本選 第5位
- ・第20回日本情報オリンピック (JOI) 本選 金賞 (1310名中、1位)、優秀賞 (上位17名)
- ・第31回日本数学オリンピック (JMO) 東京地区表彰

② P & F project (Partnerships for the goals project) に関する活躍

<中学生>

- ・クエストカップ2021 全国大会 企業賞 (三菱地所)

<高校生>

- ・第14回日本高校模擬国連大会にナイジェリア大使として出場 最優秀賞
- ・模擬 G20 Climate Change and the Future of Humanity サミット (18の国と地域からの405人、60チームによる世界高校生会議)
Most Outstanding Country Delegations - Argentina (最優秀賞)
Best Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable (最優秀大臣)

賞)

- ・第4回全国高校教育模擬国連大会 全国63校、476名226チームの中から B議場の優秀賞(オーストラリア大使として)、C議場の優秀賞(ベトナム大使として)
- ・株式会社マイナビ主催 キャリア甲子園2020(全国6,870名2,009チームが参加)優勝

・孫正義育英財団 財団生に認定(昨年度、準財団生に認定(応募660人中44人採用)され、その活動実績を以て、本年度、正規の財団生として認定された)

- ・ブリティッシュ・カウンシル主催 駐日英国大使館・朝日学生新聞社後援 高校生日英エッセイコンテスト 2020

「危機的な気候変動を回避し、豊かで繁栄する社会を私たちはどのように実現できるのか」をテーマにした日英二カ国語のエッセイコンテスト 全国より173名の応募。選ばれた二名の優秀者の一人となり、小泉環境大臣と面会、懇談。

③ R & A project (Research and analysis project)に関する活躍

<中学生>

- ・2020年度 第24回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 中学生の部 観光庁長官賞 受賞 (16432作品の中、入賞7作品に選出)
- ・第18回 調べる学習コンクール in としま 豊島区長賞 受賞

<高校生>

- ・第16回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト (國學院大學・高校生新聞社) 地域文化研究部門 佳作
- ・2020年度 第24回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 高校生の部 優秀賞・図書館振興財団賞(応募総数770作品の中から、全国第2位)
- ・第64回全国学芸サイエンスコンクール
自然科学研究部門 入選(427編の中、特別賞3編に続く上位10編)
人文社会科学部門 入選(942編のうち、特別賞3編に続く上位10編)
- ・東京家政大学生生活科学研究所 生活をテーマとする研究・作品コンクール優秀賞(上位3名)

④海外プロジェクト及び英語を活用する大会での活躍

<中学生>

- ・第10回全国中学生英語ディベート大会 優勝
- ・大学生ディベート大会 K-cup 2020 第3位
- ・Japan BP 2020 ノビス部門 チーム賞ベスト8
- ・大学生大会 Japan BP 2020 ノビス部門 ベスト8
- ・第3回日本中学生パラメンタリーディベート大会 優勝、ベストスピーカー賞第3位、第5位
- ・第10回全国中学生英語ディベート大会 優勝、ベストディベーター賞第1位
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校 主催 Tsukukoma Schools Open 2020 ノービス部門 優勝、ベストスピーカー賞第1位、第7位
- ・アジア高校生リンクバート・ディベート・チャンピオンシップ2020 ジュニア部門 ベスト4
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 ノービス部門 優勝

<高校生>

- ・第12回 IIBC (TOEIC) エッセイコンテスト 最優秀賞/日米協会会長賞(ダブル受賞)
- ・PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会2020 優勝
- ・第15回 全国高校生英語ディベート大会 オンライン東京都予選 優勝
- ・The International Public Speaking Competition 2021 日本代表選考 優勝 (2021年)

5月に行われる世界最大規模のスピーチコンテストへの参加権を獲得)

- ・ WSDC 世界高校生ディベート大会 2020 EFL 国部門 第1位、ベストスピーカー賞第3位
 - ・ 第9回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 準優勝 ベストスピーカー賞 第1位、第3位、第8位
 - ・ 第10回日本高校生パラメンタリーディベート杯東京都大会 準優勝 ベストスピーカー賞第3位
 - ・ 第11回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール 佳作
 - ・ アジア高校生リンクベート・ディベート・チャンピオンシップ 2020 ジュニア部門 ベスト8
 - ・ 大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 第5位、ベストスピーカー賞第10位
 - ・ 筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、準優勝、ベスト8、ベストスピーカー賞 第7位
 - ・ 日韓高校生ディベート大会 KJOSDC2020 ベスト8、ベストスピーカー賞 第1位、第4位、第8位
 - ・ 第9回 日本高校生英語パラメンタリーディベート連盟 新緑杯 第4位、ベストスピーカー賞第5位
 - ・ 大学生ディベート大会 K-cup 2020 第3位
(第5位、第6位、ベストスピーカー賞第1位、第2位、第9位も獲得)
 - ・ 第3回 P D A 中学生即興型英語ディベート全国大会 第4位
 - ・ 大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 準優勝
(第4位、第5位、ベストスピーカー賞 第2位、第6位、第7位も獲得)
 - ・ 筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、(準優勝、ベスト8、ベストスピーカー賞第3位も獲得)
 - ・ フェミニズムオープン 2020 (大学生大会) ベスト8 新人ベストスピーカー賞第1位
 - ・ Yale-NUS 主催 第1回 Yale-NUS Pro-Ams ベスト8 (ベストスピーカー賞第14位)
 - ・ Asian Schools Online Debate Tournament 2020 ベスト4、
Novice ベストスピーカー賞第1位
 - ・ 大学生大会 Japan BP 2020 ノービス部門 準優勝、オープン部門 ベスト12
 - ・ 大学生ディベート大会 The Kansai 2021 ベスト新人スピーカー賞第5位
 - ・ WSDC 世界高校生英語ディベート大会 2021 日本代表選手選考試験合格
 - ・ Nagoya Debate Open 2020 ベストスピーカー新人賞 第5位 (第10位も獲得)
 - ・ Hong Kong Pro-Ams Online Debate Tournament(香港主催の大学生ディベート大会) ベスト12 (ベストスピーカー賞第7位、ベストスピーカー新人賞第4位も獲得)
 - ・ プレ・ジェミニ杯 Cup 2020 (大学生大会) ベストスピーカー賞 第5位
 - ・ ICU 主催 第17回エリザベス杯 (大学生大会) 新人ベストスピーカー賞 第5位
- ⑤その他、Liberal Arts 関連の大会での活躍
- <中学生>
- ・ 「映画感想文コンクール 2020 夏」優秀賞 受賞 (東京都2位)
 - ・ 読売新聞社主催 「第70回 全国小・中学校 作文コンクール」東京審査 最優秀賞、佳作
 - ・ 「五井平和財団主催 2020年度 国際ユース作文コンテスト (小中学生の部) テーマ 2030年からの手紙」優秀賞 (世界166か国から寄せられた9578作品のうちの2位に相当)
 - ・ 日本新聞協会主催 第11回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」優秀賞 受賞 (東京都の応募総数は小・中・高あわせて10,178名で、表彰者は46名)

- ・板橋法人会主催「第八回 税をテーマとした川柳コンクール」 ジュニア部門百選 入賞 (ジュニア部門の応募総数は 3,047 句)
 - ・全国納税貯蓄連合会国税局主催 中学生の税についての作文コンクール 渋谷税務署長賞
 - ・第 19 回 鎌倉全国俳句大賞 佳作
 - ・生命保険文化センター主催「第 58 回 中学生作文コンクール」都道府県別 佳作受賞
 - ・第 23 回 長塚節文学賞 短歌部門 入選 (応募総数 3174 首)
 - ・TOTO 主催 「第 16 回トイレ川柳」 中学生・高校生受賞 (35,451 句中上位 20 句に相当。ペンネーム はなこ「西校舎 一番奥は 僕の部屋」)
 - ・金融広報中央委員会主催 第 53 回「おかねの作文」コンクール 特選 日本銀行総裁賞受賞 (1,723 名中、上位 5 名)
- <高校生>
- ・国際言語学オリンピック日本委員会主催 第 2 回アジア太平洋言語学オリンピック銅賞
 - ・第 27 回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会東京都代表選出 (B 級 38 名中 8 名) 令和二年度関東地区高等学校かるた団体戦 優勝
 - ・毎日新聞主催インターネットによる高校生小論文コンテスト 佳作
 - ・國學院大學・高校生新聞社主催 第 24 回全国高校生創作コンテスト 短篇小说の部入選
 - ・京都文学賞実行委員会主催 第 1 回京都文学賞 中高生部門 優秀賞
 - ・集英社主催 第一回高校生のための小説甲子園 東京ブロック代表
 - ・全国高等学校文化連盟・読売新聞社主催 第 35 回全国高等学校文芸コンクール詩部門優良賞
 - ・高岡市教育委員会、高岡市万葉歴史館、北日本新聞主催 第 5 回高校生万葉短歌バトル in 高岡 優勝
 - ・文化庁、厚生労働省、宮崎県、教育委員会主催 全国高校生短歌オンライン甲子園 (全国高校生短歌大会、牧水・短歌甲子園、高校生万葉短歌バトルの優勝校が参加) 作品賞として小島ゆかり賞、伊藤一彦賞
 - ・鳥取県主催 第 2 回万葉の郷鳥取県全国高校生短歌大会 (16 都県から 32 校 242 チームの参加) 優勝、パフォーマンス特別賞
 - ・國學院大學 高校生新聞社主催 文部科学省・全国高等学校長協会全国高等学校国語教育研究連合会・公益財団法人日本進路指導協会後援 「第 24 回 全国高校生創作コンテスト 現代詩部門」 佳作 (最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名に続く 5 名)
 - ・文化連盟賞 (第 26 回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会 3 位となり、全国高校生かるたグランプリに関東地区代表として推薦されたが、新型コロナウイルスの影響でグランプリ大会が中止となり、この戦績によって第 44 回全国高等学校総合文化祭の東京都代表に内定し、全国高等学校文化連盟会長より本賞が授与された。)

9 次年度以降の課題及び改善点

一年を通じて新型コロナ感染症に対する措置が講じられたため、活動に支障がでる事態となった。特に、学校交流活動では、相手国の状況が反映され、学校そのものが再開できない地域も多く発生した。オンラインの整備を進めた結果、後半には、オンラインでの活動を本格化できたが、再度の緊急事態宣言の発出により、見直しを迫られる事態となった。

次年度は、WWL 最終年度にあたる。当初の目的とした学びのオリンピック (仮称) 開催にむけて、準備をしていきたい。一方 Face to Face の関係性が、生徒たちの学びを深化させ、刺激を与えることがわかったので、引き続き、実施できるようにすることが課題である。

業務としては、高大連携における大学との連携強化や国内での連携校との交流は、引き続き課題である。各学校の学事暦をみながら、学習テーマをそろえ、活動することが弱かったのを改善していく予定である。

次年度も柔軟な実施対応が求められることとなるので、外部人材の登用をはかり、学習活動の深化をはかりたい。

オンラインを利用した会議では、時間帯によって、回線が不安定になる事態が発生した。原因究明をはかるとともに、設備の充実を引き続き図っていききたい。今後を見据え、持続可能な事業となるようはかることが課題である。

【担当者】

担当課	学校法人 渋谷教育学園	T E L	03 - 3400 - 6363
氏 名	河元 保之	F A X	03-3486 - 1033
職 名	事務長	E-mail	kawamoto@shibushibu.jp